

沈黙する 「体育嫌い」の声を聴く

ジェンダー視点を中心に



はじめに

皆さんは、体育が好きですか？
あなたの周りに「体育嫌い」という人はいませんか？

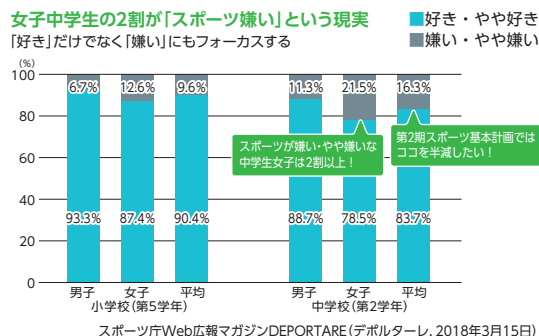
体育が嫌で逃げ出したいと感じている人は、個人的な好き嫌いの問題だから仕方がないことなのでしょうか？

日本の体育は小中学校だけでなく高校でも必修ですから、ほとんどの人は12年間も体育・保健体育の授業を受けています。すべての子どもが体育を有意義に感じ、生涯にわたって運動やスポーツを享受できるようになるためにはどうすれば良いのでしょうか？

体育授業をもっと良いものにしたいと考えている皆さん、特に体育指導に関わっている、これから関わっていく皆さん、「体育嫌い」について一緒に考えてみましょう。

1 スポーツ庁は体育・スポーツ嫌いを減らそうとしましたが・・・

体育・スポーツが嫌いだという人は実は大勢います。スポーツ庁(2017)の調査によると、「スポーツ嫌い」は、中学生の16.4%を占め、女性に限ると21.5%(スポーツ庁, 2017)にもなります。これを問題だと考えたスポーツ庁は、第2期スポーツ基本計画(2017～2021年度)で「スポーツ嫌い」を半減する目標を立てました。しかし、第2期の5年間で「スポーツ嫌い」の割合はむしろ増加し、目標は達成できませんでした(第3期スポーツ基本計画, p.31)。その評価にあたっては、「コントロールすることが極めて困難な指標であり、教育政策以外の要因が強く関連する可能性が高い」(第2期スポーツ基本計画の評価のための会議資料)と考え、第3期(2022～2026年度)から「スポーツ嫌い」を減らす目標は消えてしまいました。



2 「体育嫌い」の声 #体育嫌いMeToo

日本の教育制度では、好き嫌いに関わらず、必修である体育から逃れることはできません。第2期スポーツ基本計画で「スポーツ嫌い」を減らす目標が示された後、これに対する違和感がSNSなどで発信されるようになりました。その一つ「体育の恨みつらみ川柳」(例えば、「持久走周回遅れで拍手され」)などが話題となり、これまで沈黙してきた「体育嫌い」の声が共有される状況が生まれました。

それまで、「体育嫌い」の当事者の声は公的な場にはほとんど届いていませんでした。当事者は多いにもかかわらず、体育授業や学校のあり方に対して積極的に声を上げることはまれでした。むしろ、体育行事や運動部活動など学校でのスポーツのパワーに圧倒され、スポーツができないことを仕方がないと諦めてきたと言えるでしょう。しかし、経験を振り返ってみると、「体育嫌い」の自分自身が責められることは理不尽であり、むしろ、体育授業や学校体育そのものに問題が隠されていることに気づき、声を上げ始めたのです。それは、まさに「#体育嫌いMeToo」です。

3 PEGP研究プロジェクトについて

PEGP(Physical Education & Gender Politics)研究プロジェクトでは、「体育嫌い」は「教育政策の要因が強く関連する」のではないかと考えました。「体育嫌い」に関する先行研究は、能力主義など指導者の問題を指摘しているものの、カリキュラム自体を問うことはありませんでした。また、要因分析や先行研究に基づく仮説や理論の検証など量的研究が中心であり、設定された枠組みの外にある事実をつかめないことに限界があります。

研究では、競争的な特徴を持つスポーツ中心に構成されている体育カリキュラム自体に「体育嫌い」を生み出し、男女差を顕在化させる構造的な要因があるのではないかと問いを立てました。そして、主に大学1年生を対象としたアンケート調査と「体育嫌い」の当事者へのフォーカス・グループ・インタビュー(FGI)を通して、要因を探りました。

このリーフレットには、本研究の協力者がFGIの中で語ってくれた内容や「体育嫌い」を考える視点を記載しています。体育カリキュラムや体育実践をどのように変えていけば良いのか考える手掛かりになればと願っています。

用語について

- * 「スポーツ」は、競技スポーツだけでなく、散歩や運動遊びを含む幅広い身体活動意味し、「体育」は学校教育の場で行われるスポーツ活動を指します。ここでは、スポーツと体育が区別されていないように感じられるかもしれませんが、学校期の子どものスポーツ活動は大半が学校体育であることから、スポーツ庁もスポーツ嫌いと体育嫌いを関連づけて使用しています。
- * 「#MeToo」は、今まで沈黙されてきた性的被害の問題を公表することで、社会を変えようとする運動の中で使用されるようになりました。多くの人が「私も」を意味するこのハッシュタグを付けて性的被害を告白するようになりました。

FGIで明らかになった「体育嫌い」の声（協力者はすべて近畿圏の大学生、シスジェンダー・異性愛の女性・男性）

みんなの声

身体やパフォーマンスが他者の目にさらされる場

声1: 学校体育の印象は、怖い、だ。運動できないと皆の前でバれるのが怖い、皆からの視線が怖い、チームプレイのスポーツをするときに足を引っ張るのが怖い、でもみんなからハブられるのが怖い、という気持ちが混ざって「怖い」という印象がある。（女性）

声2: テストみたいな実技テストという形でやるときとかになると・・・どんだけ下手くそなんやろうとか、どんだけできひんのやろうとかっていうのを見るような感じで、人前で何かパフォーマンスすること自体にもトラウマというか、あんまり良くないイメージを持っています。（男性）

声3: 肌を見せるのが嫌で、普段もずっと襟付きの服を多く着たりして肌を隠そう、隠そうとしてる中で、夏になったらそんなところじゃない、もうパンツだけで泳がなあかんっていうのが本当にストレスやって。（男性）

技能中心の授業

声4: 体育の先生に「体育って何のためにあるんですか」というのを聞いたことがあって、そしたらその先生は「楽しむためにあるんだよ」とって、体を動かすためにあるものなんだよっていうのをおっしゃられたんですけど、じゃあ何でドリブルができれば5点で、あそこには何か入れられたら3点で、評価が5でとかなるんだろうって。（女性）

声5: ソフトボールの試合とか野球の試合っていうのをテレビで見ている、明らかに遠くに飛ばすことっていうのが、これが素晴らしいお手本やっていうのをみんな頭の中で抱いてて・・・それに近い運動ができる人っていうのが、よくできる人になっちゃって、その理想形に近づけない人ができない人になっちゃって。（男性）

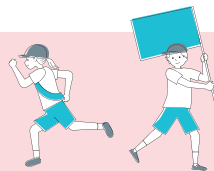
体育の目的と実践とがかけ離れている

声6: 小学校から高校にかけてまで、うまくなること以外に体育の意味があるっていうのは、もう全く感じたことがなかったです。ほんまにうまくならなあかんのやとか、上手にできなあかんのやなっていうのが、ほんまにそれしか思わなくて、だから体育はできひんし、どうせ体育の成績は悪くても仕方ないなっていうふうにもう割り切っていました。（男性）

スポーツの特性としての競争・序列・記録

声7: チームの中で運動できない人が、明らかにみんなに影響を与える。明らかに足引っ張ってるやん、こいつって思われてしまう環境になるから、体育とかって嫌な経験になったり。（女性）

声8: 体育って、もう大体がポイント制だったりとか、そういう数値化されてるから、この人はこんだけできる、この人はこんだけできないっていうのが、すごい。（女性）



女性の声

男性基準で定められる規範

声9: (下着が) あんまり透けると他の男子が見てしまうからとか、反応しちゃうからっていうふうに言われてたの思い出して、それって男子が気を付けるべきことで、私たちが気を付けるべきことではない。（女性）

女性の身体とスポーツ

声10: 運動する際に(お腹や胸などの)脂肪が揺れるのがとても恥ずかしかった。特に水着が辛かった。（女性）

声11: 実際に胸が大きい友達にコソコソと男子の話題にされていて胸が目立たないようにいつも猫背で隠れていた。（女性）

生理への対応: 隠すもの?! 女性が克服するもの?!

声12: 人にもよるんですけど、(生理中は) めっちゃしんどいし、できれば動きたくないし、自分の精神状態もそんなに安定する時期じゃないから、休むのは普通に自分の、特に女子の権利としてあってしかるべきものやと思うし、別にコントロールできるわけじゃない・・・みんなと一緒に泳ぎたいけど、生理だから泳げへんっていう子もいると思うのに(強制的に参加させられる)。（女性）

声13: (持久走は) 河川敷みたいな所を回って、折り返しておんなじルートを逆に走って戻ってくるっていうコースやったんですけど、その間、一個も、多分、公衆トイレはなくて。（女性）

声14: 中学のときに柔道の授業があって、柔道の道着が白なので、生理で、しかも寝っ転がったりとか、受け身とったりとかするとときに無理やり横にならなきゃいけないかったり、柔軟のときとかも開脚して前に倒れたりとか。（女性）

()は研究者による補足

用語について

* シスジェンダー (Cisgender) とは、性自認(自分の性をどのように認識しているか)と生まれたときに割り当てられた性別が一致している人を指します。

男性の声

男はできて当たり前

声15: 先生方からも何かこういう体育っていうのは男の人はできて当然みたいな感じで扱われてきて、・・・やり方だったりだとか分からないままやっていくことが多かったです。で、それ分からないままどんどん授業が進んでいって。（男性）

声16: 体育の授業とかで、普通にできなくてやってるだけなのにふざけてるっていうふうには先生に勘違いされてしまったりとか、そういうことがあって、辛いなって思ってる時期がありました。・・・持久走大会での経験なんですけど・・・(体調)を気にしてセーブしてたり、体力をセーブして控えめに走ってたりとかすると、ものすごい怒号で怒鳴られたりっていう経験がありました。（男性）

男らしさを競わせる場

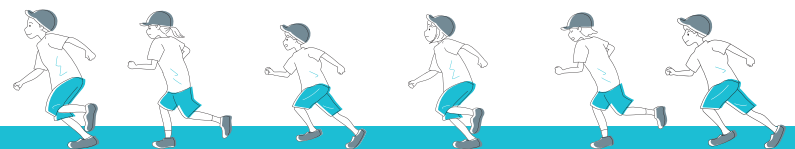
声17: 私が学校体育を嫌だと感じるようになったのは、この頃(中学校入学時)だったと思います。男女で授業をしていたものが男子だけの授業に変わった頃。・・・小学校までの男女・上手下手関係なくワイワイしていた体育から、男らしさ(協力者による補足:ここでは運動ができる)を競わせるような場になったギャップに絶望の日々でした。（男性）

声18: 小学校では、組体操がすごく盛んでした。教員が団結の名のもとに、無理な段数を積み上げることが常態化していた。・・・ピラミッドと呼ばれる技も男子児童全員に強要されたものである。小学校6年生の時点で身体的な差がないのにも関わらず、男子児童だけがこの理不尽を強いられることに、憤りを感じた。（男性）

スポーツとヒエラルキー

声19: 体育行事に協力しない生徒や、できない児童は、他の児童からのいじめに耐えなければならないのだ。私は、何度も「お前じゃなくもっと運動神経がいいやつがうちのクラスにいたらいいのに」と心ない言葉を何度もかけられた。（男性）

声20: (スポーツできる人たちが) 下位というかその下のほうにひけらかすというか。自分はこういう、経験もしてとかアプローチされてとかっていうのをさらにマウントを取ってくるような形でやってくるんで。・・・スポーツができる＝モテるみたいな言説的なものもあって、そのスポーツのヒエラルキーがそのまま学生生活にも直結してたように思います。（男性）

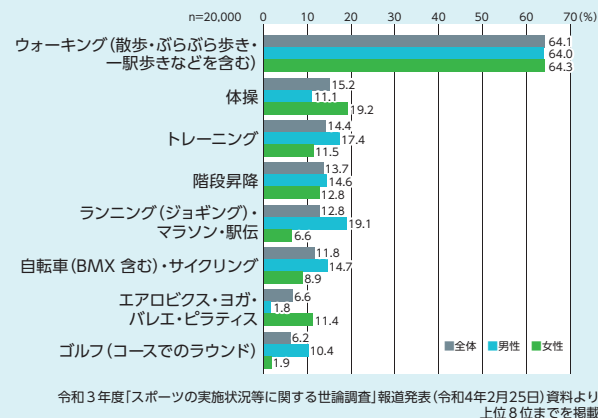


「体育嫌い」を考える視点：3つの視点から意見交換をしてみましょう

1 学校体育は生涯スポーツにつながっていないのでは？

競技スポーツ中心の体育カリキュラムは当たり前？

スポーツ庁による令和3年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」では、この1年間に実施した種目は「ウォーキング」が飛び抜けて多く、「体操」「トレーニング」「階段昇降」が続きます。男性は「ウォーキング」「ランニング」「トレーニング」「自転車」「階段昇降」の順で、女性では「ウォーキング」「体操」「階段昇降」「トレーニング」「エアロビクス・ヨガ」の順になっています。「トレーニング」や「ランニング」の内容は精査する必要がありますが、大事な点は体育で学習した内容がその後の生活に生かされていないということです。競技的なスポーツを生涯スポーツとすることには安全面から考えても無理があり、むしろ、体育の内容をその後の生活で生かせるものにシフトしていく必要があるのではないのでしょうか？. 小中高と12年間もの体育授業は一体何のために必修化されているのか問い直すことが重要でしょう。



2 「できること」は何よりも大事？

「主体的・対話的で深い学び」はどこに？

FGIで明らかになった「体育嫌い」の声をみると、体育では今なおできることや記録など、技能の側面が重視されていることがわかります。現行の学習指導要領(H29年改訂)では、「運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』、『学びに向かう力・人間性等』を育成することを目標として示す。」とされています。しかし、体育では、依然としてできることが重視され、評価も技能中心で行われていることがわかります。生涯スポーツにつながる学びとは何かを熟考し、それに伴って評価の観点も検討してはどうでしょうか？

3 ジェンダー視点から考えると？

たくましい心身を持った男性が中心に置かれている？

「体育嫌い」がなぜ女性に多いのでしょうか？運動部活動を含め、学校体育が競技スポーツ中心になっていることと関係はないでしょうか？ヨガやフィットネスは体育カリキュラムの亜流(おまけ)のような扱いになっているように思えます。競争が重視される反面、身体の調子を整えるなど、身体のケアについての学びは薄いようです。一方、男性の「体育嫌い」は女性よりももっと声を上げづらい環境になっているようにも思えます。また、性的マイノリティの人々にとって体育は居心地の良い空間でしょうか？学校体育におけるジェンダー・セクシュアリティの問題は多く残っています。

体育・スポーツのこれから：誰も置き去りにしない



1 新たな目標としての「フィジカル・リテラシー」

第3期スポーツ基本計画では、「体育・スポーツ嫌いを減らすこと」に代わる新たな目標を次のように設定しています。

「体育・保健体育の授業等を通じて、運動好きな子供や日常から運動に親しむ子供を増加させ、生涯にわたって運動やスポーツを継続し、心身共に健康で幸福な生活を営むことができる資質や能力(いわゆる「フィジカルリテラシー」)の育成を図る。」

スポーツ庁はフィジカルリテラシーについてこれ以上の説明をしていますが、具体的にどのような力を指すのか、どのように評価するのか今後の進展が期待されます。

2 国内外の体育カリキュラムの潮流

海外では、身体リテラシー (Physical Literacy) を中心にした優れたカリキュラムや基準が作成されています。例えば、SHAPE America (アメリカ保健体育教育者協会) は「身体リテラシー」を基本としたナショナルスタンダードを作成し、体育授業の成果として学習者が何を知り何ができるかを示しました。また、カナダのオンタリオ州の保健・体育カリキュラムでは、初等・中等教育段階を通じて身体と健康のリテラシーを高めるというビジョンが描かれています。さらに、UNESCOは、質の高い体育 (Quality Physical Education) の要素として、子どもの保護と安全、インクルージョン、身体リテラシーを示しています。

3 まとめ

実際の「体育嫌い」当事者の声を聴いてどう感じられましたか？

パフォーマンスが明確に可視化され、それらに優劣の評価がなされる体育の場は、学習者にとっては、低いパフォーマンスにさげすみと批判の目を感じ、身体やパフォーマンスがさらされることへのストレスが強まる空間になっています。優れた心身を誇示する場は、優位者にはポジティブな影響を与えますが、劣位者には身体を通したネガティブな刻印となっています。また、身体への眼差しは男女で異なり、男性に対してはたくましい筋肉質な身体を求め、裸体さえ誇れることが期待され、女性に対しては性的な対象としての身体を意識させるものであることも読み取れます。

すべての学習者に「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する」ことを目指して設定された体育が、競技的なスポーツを学習の中心に置いたことによって、むしろ身体を通したジェンダー構築のホットスポットのような状況になっていることを直視すべきでしょう。「誰も置き去りにしない」ことを目指し、より多様な価値から構成される体育カリキュラムのあり方を考え続ける必要があります。

用語について

- * スポーツ基本法(2011年制定) は「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」と定めています。
- * スポーツ基本計画は、スポーツ基本法をもとに、体育・スポーツ活動に関する国の政策を示したもので、国の予算や配分が決める重要なものです。5年ごとに策定され、2022年から第3期がスタートしました。スポーツには競技スポーツだけでなく、「健康維持や仲間との交流など多様な目的で行う」ものがあり、「スポーツは文化としての身体活動を意味する広い概念であり、各人の適性や関心に応じて行うことができる」としています。

さらに学びたい人に役立つ参考資料や文献は、次のHP「体育・スポーツのジェンダー・セクシュアリティのポリティクス：『誰も置き去りにしない体育』をめざして」にまとめています。ご活用ください。

<https://sites.google.com/view/pegp/>



本研究はJSPS 科研費(課題番号:19K11596)の助成を受けて実施しました。

研究課題:包摂的な体育カリキュラムの構築に向けて:クイア・ペダゴジー及びリテラシーを中心に(R1-R3年度)、井谷恵子・井谷聡子・関めぐみ・三上純
連絡先:研究代表者 井谷恵子 itani#kyokyo-u.ac.jp (#を@に変えてご利用ください)

リーフレット発行年:2022年8月